

社会・文化を「私と他者」を通して捉えなおす —共に生きることばをめざして—

高橋 聡

科目名：母国と日本の新聞、歴史教科書をよみ比べる

レベル：初級1・2／中級3・4・5／上級6・7・8

履修者数：9名

1. 何をめざすか

ひとつのできごととは、さまざまな視点から見ることで、その姿が変わる。わたしたちはその異なるいくつかの姿を重ね合わせる作業を通して、自分の考えを捉えなおし、そのできごとから何かを学ぶことができる。このクラスでは、自分の最も興味のある社会的な「できごと」をひとつ選び、母国と日本の新聞、或いは歴史の教科書をよみ比べることで、自分にとってこの「できごと」はどのような意味があるのかという視点から、社会的な問題を自分の問題として捉えなおしていくものである。言語教育は、他者（異なるもの）との出会いを進めていく行為であり、その他者と共に幸福に生きていく自己をどのように拡張・更新していけるのか、試み続けるものだと思う。教室参加者と共有したクラスの目的は以下の通りである。

- ・ある「できごと」についての異なる見方・考え方を経験し、それらがつくられる背景（社会・文化）を考えることを通して、当然とされた前提を問なおす。
- ・その「できごと」と自分との関わりをもとに、今、ここでの自分の「できごと」として「できごと」を捉えなおす。
- ・上記のさまざまな言語活動を通して、それぞれの LIFE（命・人生・生活）にとって大切な「自分のことば」（見方・考え方）をクラスの関係の中で育てる。

2. 「できごと」と「私」

社会的な問題を自分の問題として捉えなおしていくためには、「なぜ、私はこの「できごと」に興味をもつのだろうか」という問いが大切になる。さまざまに異なる見方、考え方を通して自分の考え方を再構築していくために、「できごと」と「私」との関わりがその支えになっていくからである。その問いを考え続けることで、この「できごと」を通して自分は何をわかってしているのかが形となり、無数にあるメディアや資料の選択、クラスでのディスカッションや私にとっての「できごと」の方向を示すコンパスになっていく。クラスでは、最初の数週間をかけて、「できごと」の決定となぜこの「できごと」なのかをまとめた動機文を作成し、クラス参加者で読み合い、問題意識（テーマ）を形にしなから、教室参加者と共有していく。その後、「問題意識（テーマ）」をもとに、自国、日本の資料を調査・発表し、話し合いを行い、それを通して自分にとってこの「できごと」はどのような意味があったのかをもとにレポートにまとめていく。

3. 2015 年度春学期の参加者たちと「できごと」を結ぶもの

2015 年度春学期のクラスは、アメリカ国籍の日本人 3 名 (①②③)、フランス国籍のセルビア人 1 名 (④)、中国人 4 名 (⑤⑥⑦⑧)、イタリア人 1 名 (⑨) の 9 名で構成されていた。彼らの選んだ「できごと」と彼らを結ぶテーマは以下の通りである。

表 1 参加者のテーマと「できごと」

	テーマ	できごと
①	国籍と民族の異なる「私」は何者なのか	黒人系日本人のミスユニバース日本代表
②	日米の間で揺れる「私」	米のアフガン侵攻と日本の報道
③	民族とは何か	ルワンダ虐殺
④	移民のアイデンティティとは何か	シャルリ・エブド襲撃事件
⑤	中国人である「私」が日本にいる今、考えたいこと	日清戦争
⑥	南京市出身の「私」は日本人の友に南京虐殺をどう語るべきか	南京事件
⑦	日本人のボーイフレンドの祖父は今も戦争に痛みをもち続け、天皇を憎んでいる (なぜ戦死者を奉るのか)	靖国神社とは何か
⑧	なぜ「私」は自国の教育が苦しかったのか	天安門事件
⑨	「私」にとって、表現の自由とは何か	シャルリ・エブド襲撃事件

どのテーマも、国籍・民族に依らない「私」としてのアイデンティティが関わってきており、動機文の段階では自己アイデンティティについて興味深い議論が起こった。「広大な世界で自分を見つけるためには、国籍や人種、宗教というコンセプトではもう不可能で、ひとりひとりが自分を見つけだすコンセプトを自分で創りだすしかない」参加者のひとりが言ったことが記憶にある。共に生きることにつながる力強さのあることばだと思う。

4. 圧倒される自己

しかし、調査、発表と、その後の「できごと」を主体とした議論では、「私」を離れ、国籍、人種、宗教等をキーワードとした一般論の応酬に陥ることがたびたび起こった。当事者の顔が見えない「できごと」では、何百万もの死を引き起こす国家や民族の、或いは宗教の圧倒的な力の前に、ひとりの人生から生まれたテーマは委縮し、その翼をもがれてしまうのだ。その中でも、参加者のひとりレポートでこう述べている。「私個人が何かを言ったところで何かが変わるわけではないが、自分の無知に気づき、受けた教育以外にたくさんの方がいること、私の意見をもてることを発見できたことは幸福なことだ」個人が圧倒される「できごと」だからこそ、こう述べた参加者がいつか、自己の中に「できごと」を取り込んでいく希望という、参加者の人生の長い関わりから、この実践活動という「できごと」を見つめなおす必要があるのだろう。

(たかはし さとし、早稲田大学日本語教育研究センター)